

## 【1】 小学部教育の基本的な考え方

小学部は社会的自立を目指す本校の教育の最初の6年間を担っている。

我々はこの小学部のめざす子ども像を「友だちの中で、よろこんで取り組む子」としてきた。

「友だちの中で」ということばの中には、自分だけの遊びの世界から脱却し、友だちと関わりをもって活動できるようになってほしいという思いが託されており、また「よろこんで取り組む」ということばの中には、物事に興味関心を示し、生き生きと集中して取り組む力が育ってほしいという願いが託されている。



図1 段階別教育内容表Ⅲ 段階到達度の変容

右図1は、本校が開発した段階別教育内容表をK男が2年間かけて取得して来た様子を示したものである。我々は、学習したことが子どもたちに定着し、このグラフが中学部へいくまでに少しでも広がっていくことをめざしている。

本校では、これまで「からだづくり」からこのめざす子ども像にせまってきた。精神発達における身体運動の重要性（例えば、ムーブメントの「動くことによって学ぶ」という考えのように、発達の初期は、身体運動機能が軸になって展開していく。これを土台として知的・心理的側面の機能も引き出されていく。）を認め、実践してきた。この「からだづくり」は小学部の児童にとって大変意義のある研究であった。

ただ、その中で「表現する、聞き取る、かかわる。」といったコミュニケーションの力に足りないものがあることが指摘されてきた。

一般的に障害をもたない子どもたちは、就学前には家族とはもちろん近所の人や、幼稚園または保育園の友達と、自分の思いを伝えたり、日常の会話をするなど基本的なコミュニケーションの力をつけている。また、就学後は、さらに大きな集団の中で豊かな経験を積み重ねコミュニケーションの力を高めていくことができる。

だが、本校の小学部の子どもたちをみると、障害による発達の遅れや偏りに起因して次のような実態が見られる。

- ・自己中心的な遊びが多く、うまく友だちと関われない。
- ・関わろうとする意欲はあっても、表現が未熟で分かりにくい。
- ・語彙数が少なく話題が乏しい。
- ・限られた状況の中で特定の人としかコミュニケーションができない。
- ・表出言語がほとんど無い子や、あっても一語文や二語文で話す児童が多い。
- ・生活に結び付かないことば遊びにおわっている児童もいる。

具体的な例をあげると、次のようなことがあった。

教室でおもちゃのトラックに乗り、高いところにあるものをとろうとしたY男はバランスをくずして床に落ち、腕の骨にひびが入るほどのけがをした。突然に泣き叫ぶY男に「どうしたの」とたずねても泣き叫ぶ以外の方法はとれず、教師は前後の状況や本人の身振りからことの成り行きを察するしかなかった。

途中で転校してきたM男は積極的に人に関わろうとするのだが発音が不明瞭なため自分の意図が伝わりにくく、そのため、もどかしくなって他人の手をつめるなど直接手を出してしまうことが多かった。廊下で出会うと、にこにこしながらよってきて一言何かを言った後、このほうが手取り早いとも言えるように腕をギュッとつめってくる。これが彼のコミュニケーションの手段であった。

このように伝達の方法が未熟で自分の意志をうまく伝えることができない子どもたちがいる。

また、S男は登校してくるなり「土曜6時半は？」と質問を繰り返す。誰かが相手になって同じように「土曜6時半は？」と同じ質問をすると、喜んで「お笑いマンガ道場」と答える。だが他の人が答えを言っても、知らん顔をして同じ質問を繰り返す。[おはよう]のあいさつは、それから教師に促されてすることになる。ことばが生活の場面と遊離した遊びとして使うことが目立っている子である。

その一方で教師がうまく対応することで意欲的に話そうとする児童もいる。例えばE子は教室においてあるままごと道具を使って遊ぶのが大好きである。教師が関わり相手をするとき「食べて」「ハイ」「これハンバーグ」などと、うれしそうによってきて、楽しくてたまらないといった表情で話しかけてくる。

この他にも、さまざまな実態の子どもたちがいる。

このような実態を持つ小学部のコミュニケーションの持つ意味は、

- ・楽しく人と関わることができる。
- ・自分の思いや要求をうまく人につたえることができる。
- ・いろいろな場面でコミュニケーションできることによって、生活の範囲をひとつひとつ広げていく。

など、友だちや身近な人と関わりながら、日常生活に必要な力をつけてほしいと願う小学部の目標に直接関連するものである。そして、将来の社会的自立をめざすためにも、ぜひ、身につけさせたい重要な力のひとつである。

なお、我々は、対人的なコミュニケーションの力をつけるだけでなく、児童一人ひとりの自己内の対話を育てていきたいと考えている。つまり、もっと遊びたい、もっと動きまわりたい時期にある小学部の児童たちに、そのような気持ちを大切にして自我の充実を図りつつ、個々の発達を見極めながら中学部へ向けての自制心の芽生えを育てていくことにも取り組んでいきたい。

以上のようなことを基本的な考えとしながらコミュニケーションの視点からの研究に取り組むことにした。

## 1. 小学部のねらい

- ・担任教師、クラスや学部の友だちと楽しんで、コミュニケーションをしようという意欲を持たせる。
- ・個の発達と障害に応じたコミュニケーションの技能の向上を図る。

要求を伝える

身振り、表情、視線等による感情の表出

話しことばによる伝達力

書きことばの習得

- ・身近な人と共感することや、子どもたちの経験を大切にすることによって、子どもたちが伝えたいという内容を増やし、高めていく。
- ・みため、つもり活動を大切にしながら、自我の充実からその次の段階の自制心の芽ばえへの発達に向けて援助する。

## 2. 研究の仮説

コミュニケーションの力を育てていくために次のことを仮説とした。

コミュニケーションの力は内容も、技能も、意欲も伴ってこそ発達していくものである。

小学部の児童は、伝達しようという意欲を持っている。その表現方法はさまざまであるが「聞いてほしい。」「分かってほしい。」という気持ちはどの子も持っている。だが総じて表現の仕方が未熟であり聞き手が意図を読み取らなければ、コミュニケーションが成立しないことが多い。

何かを伝達しようとして、うまく伝えられた喜びは、さらに、コミュニケーションをしようとする意欲を高め、もっとうまく伝えるための技能や、内容を広めてもっといろいろなことを伝えたいという気持ちへとつながっていき全体的な力を高めていくことができる。

逆に、何かを伝えようとしても、相手に伝わらないことが続くと、今持っている意欲さえも失ってしまう恐れがある。そうなったら、いくら話すべき内容を増やしたり、話し方がうまくなるように指導してもコミュニケーションの力を伸ばすことはできない。

聞き手となる身近な大人が、子どもたちが伝えようとしている意図をよく読み取り、子どもたちがうまく伝えられたという喜びをさらに高めていくことによって、コミュニケーションの力を高めていくことができる。

身近な大人との間でつけたコミュニケーションの力は自信となって、コミュニケーションの対象となる範囲を広げ、社会的自立へと向かっていく力となっていくと考えられる。

そこで、小学部のめざすコミュニケーション像を

**身近な人と楽しんでコミュニケーションする子**

とした。

## 3. コミュニケーションに視点をあてた教育課程の編成

先のねらいを実現させるために、児童の精神発達の特性、及び障害の実態を踏まえ次のように教育課程を編成して研究実践をすることにした。

- ① 週時程を右表のようにし、生活リズムの確立を図った。
- 1 校時—日常生活の指導、個別学習（個別学習以外の児童はリズム・サーキット）
  - 2 校時—合同学習（体育、音楽）
  - 3・4 校時—生活単元学習（クラス、合同）
  - 5・6 校時—クラス学習

- ② 指導者がいろいろな遊びを教えていく「なかよしタイム」と、小学部の児童全員が集まって自由な遊びを楽しむ「遊び」の時間を設定し、遊びの内容を増やしていくとともに、遊びの定着によって、教師や友だちとの楽しいコミュニケーションを図った。

さらに、その内容を交流学習の場で生かしていった。

- ③ 個別学習の時間を確保し、日常生活や生活単元学習などと関連させながら、基礎的なことばの力を伸ばすことをねらった。
- ④ 生活単元学習や遊びの学習、日常生活の指導を中心に、学校生活のすべての場面でコミュニケーションの充実をねらった活動を意図的・計画的に入れた。

#### 4. 指導の方針

- ① 安心して話せ、話しやすく、分かってもらえる場での活動を大切にしていく

発達が未熟な小学部の段階では、大人である聞き手をとおしてコミュニケーションの楽しさを知るという場面が多くなる、そこで教師は、子どもたちの話をしたい、伝えたいという思いを大切にし、子どもたちの出すサインを読み取る姿勢でのぞみ、子どもたちの意欲を育てるようにしたい。

大人の側に子どもを合わせるのではなく、大人が子どもに合わせ応じる姿勢を持つという、いわゆるインリアルな基礎的な考え方（P64.資料参照）を大切にしていく。

- ② 子どもたちが、興味・関心をもち楽しいと思う具体的な活動を通して、コミュニケーションを大切にしていく。特に、いろいろな活動の中で、子どもたちにとって楽しいのは遊びである。遊びの要素をふんだんに取り入れながら楽しく遊ばせたい。

- ③ 生活を大切にしながら実際にからだを使う活動を大切にする。

子どもたちはからだを通して学んでいく。体や心をいっぱい使う場面を設定し、ことばだけを遊離させないようにする。

- ④ 個への対応に取り組む。

個々の実態や課題、指導法に着目し、個別指導の時間はもちろんのこと、生活や学習など学校生活のあらゆる場面に目標に沿った指導ができるように個別の目標を立てて指導していく。個別の目標の作成にあたっては、その子の弱い部分・未発達の部分のみに目を向けるのではなく、よい所・得意なこと・よく発達している部分にも着目する。また、子どもたちの生活年齢も考慮していく。

表1 小学部の週時表

曜日	月	火	水	木	金	土			
時間									
8:40	登校・朝の生活								
9:05	学級活動	個別指導/リズム・サーキット							
9:50	合	体	合	遊びの時間 なかよし タイム	合	体	合	習	生活単元学習
10:30	長						体	短	
10:45	自由遊び								
11:00	生活単元学習						生活単元学習 補りの活動		
12:00	給食・洗面						下校		
12:45	掃除・自由遊び								
13:30	学級指導								
14:10	個別指導	個別指導	習替え 補りの活動	クラブ 委員会	習替え 補りの活動				
14:20			習替え 補りの活動	習替え 補りの活動					
14:55	習替え 補りの活動				習替え 補りの活動				
15:30	下校								

(注) これは、高学年の週時表である。